

# 比較及び考察

## 比較及び考察

ここまで我々は、「元気な団体の秘訣」というテーマのもと、元気に活動するために必要な要素はとして「目的」「人」「意欲」「場（機会）」の4つであるという仮説を立て、「きらりよしじまネットワーク」と「上川名地区活性化推進組合」の2つの団体を調査してきた。2つの異なる団体の調査を通して、相違点はもちろんあるものの、「元気の秘訣」に通じるであろう共通項にも出会うことができた。

ここからは4つの仮説を軸に2つの団体の共通点、相違点を比較しながら、今回調査をした上で発見した新たな要素も加えて考察をする。

### 1. 「目的」

「きらりよしじまネットワーク」では、「自治部会」「環境衛生部会」「福祉部会」「教育部会」と、組織が4つの部会に分かれており、それぞれの部会ごとに目標や計画を策定し、それに基づき活動をしている。「地域を存続させ、次代へと繋げる」という目的を住民と共有し、その実現のため、地域の課題に向き合い、住民の意思で自治機能を含めた活動が行われている。持続可能な地域づくりのプロセスデザインを構築していることも、目的の達成に大きく寄与している。住民が数年かけて「知る」「考える」「動く」「続ける」と、徐々に地域運営の力量を高めることができる仕組みをつくり上げたことで、住民が主体的に地域の課題解決に対応することができるようになってきている。計画の策定、遂行、評価及び改善のPDC Aサイクルに住民の意見が反映され、「自分たちが立てた計画だから、自分たちがやる」という意識の醸成及び目的の共有が的確に図られている。

「上川名地区活性化推進組合」は、「仲良く楽しくを次世代へ」をモットーに掲げ、楽しい企画を複数設定して活動している。それぞれの企画を実行するメンバーは、その活動に取り組んでみたい会員によってチームが構成されている。活動への意欲が高いメンバーによるチームゆえに、目指すべき目標や活動の目的等も自然と共有化できている。参加する活動によってメンバーは異なっても、日頃からコミュニケーションを高めるかわりが意識的かつ積極的に行われているので、組合としての活動のコンセプトがぶれることはない。会員相互で合意形成を図ったり、自分たちが楽しめる活動に取り組んだりすることを通して、「地域を盛り上げよう」という目的が常に統一された状態で活動することができている。

以上のように、元気に活動している2つの団体では、それぞれの目的や実現に向けた組織運営は異なっていたが、共に団体に関わる人にとっての「目的」が明確であるという共通点が見られた。

### 2. 「人」

仮説の段階では、「熱意のある人」がいて、リーダーシップを発揮して牽引していることで、団体が元気になるのではないかと想定していた。調査を進めていく中で、やはりキーパーソンは存在したが、その人だけの活躍ではなく、団体には共通の想いを持った人が集まり、それぞれが協働することでより活発な活動ができるようになっていた。

さらに、「きらりよしじまネットワーク」では、人材育成のシステムがしっかりと構築されていた。自分たちの孫世代まで見据えた地域づくりを進めるために、18歳から35歳の若者が地域から推薦され、活動に参加する仕組みになっており、新しいリーダーを発掘及び育成する体制が整っている。推薦された若者には数年に及び研修の機会が用意され、その上で、実践の機会も与えられている。学びと実践を

繰り返すことで、若者に自信を与えて、地域で活躍できる若者として育成するというプロセスが構築されている。また、組織内の役割も分担されていて、特定の人に依存しない体制も整えられている。

一方の「上川名地区活性化推進組合」は、「きらりよしじまネットワーク」とは異なり、後継者の育成に課題を抱えているようである。組合運営の中枢を担うのは3人程度と少数である。この3人で企画やイベントの段取りを行っている。行事の際には、ある程度段取りをしてから他のメンバーに任せれば、それぞれが動いて事業運営が成り立つとの話があった。地域住民の間で長年にわたり積み重ねてきた関係性や互いの信頼感が土台にある様子が伺えた。若者や移住者も少ない地区の現状からか、組合のメンバーにも、「自分たちの代まで楽しくやれば良い」という考えもあるとのことだった。子供を対象としたイベントを企画し、地域への愛着を育てようという取組も行われているが、地元からの参加が少ないという課題もある。地区外に出た若者も、地域の活動に仲間として迎え入れる意識を持ち、地域での活動に関わる人を増やしていきたいと考えている。

以上のことから、2つの団体ともにキーパーソンがいるという共通点と、人づくりや担い手の育成体制の構築という相違点が見えてきた。人づくりや担い手育成の体制を整えるには、「きらりよしじまネットワーク」の事例を参考にすると、「人材育成」を目指して行う活動は、持続可能な地域づくりにつながる取組であるという共通認識を、団体や住民間に根付かせることが大切であると思われる。団体の活動の今後を託す側も託される側も、希望を持って活動を継承できるという安心感が、元気な活動を継続していくために欠かせない人づくりや担い手育成へと繋がっているのではないかと考える。

### 3. 「意欲」

意欲とは、個人の中に存在するものであり、それを維持することはもちろん、他人に意欲を伝えたり持たせることは容易ではない。では、どのようにメンバーを意欲的にさせているのか。

「きらりよしじまネットワーク」は、若い世代を育て、事業が継続できるような体制を築くために、子供に愛郷心を教えるだけでなく、それを教える大人が愛郷心を抱くことができるような体験を設定している。大人と子供が一緒になって地域を回り、地域の良さを体感することで、愛郷心を高めた大人や子供が増えていく。大人が生き生きと活動している様子を見て、次の世代が憧れを持つ。そして仲間入りした人が表に立って活躍できるまで、大人がその育成を支える体制がある。若い世代を育てた上で役割や活躍する機会を与えていることで、本人が「やりがい」を感じ、自分がやるぞという「使命感」が生まれ、それが活動の意欲へと繋がっていると考えられる。ただ役割を与えるのではなく、当事者が自信を持って遂行できるまで育てることが重要で、そうした育成システムの中で意欲の継承までもが可能となっているのではないだろうか。

「上川名地区活性化推進組合」は、楽しいことをしようと協力して活動している中で、慣れ親しんだ郷土を盛り上げようという機運が、活動のモチベーションとなっている。住民の多くは地区外の人にも自慢したいほど上川名地区を誇りに思っている。上川名に住む人々が一丸となって、地域の大自然や住民同士の関係性などを長年大事に守ってきたという強い気持ちがあるからであろう。より良い地域をつくり上げるためには、地域を大切に思う住民個々の郷土愛が必要不可欠である。郷土愛があるからこそ、地域の活動の楽しさも増していくと思われる。団体に所属するメンバーが意欲的に活動し、「やらされている感」ではなく、自発的な取組となるには、それぞれが活動に意義を見出すことが必要である。活動している人自身が意義を見出すことで、メンバー全員が「郷土を盛り上げたい」と同じ方向を向き、やりがいを感じながら事業を実施することができている。

意欲とは、義務感だけでは育たない。2つの団体では、大人の気付きや学び、地域社会への愛郷心や

郷土愛といった思いを高めることを大切にしていた。個人の思いや意欲の高まりが周囲に伝播し、それをさらに維持・継続していくことで、団体の活動に資する「意欲」を高めているという共通点が見られた。

#### 4. 「場（機会）」

仮説では、頻繁に集まり活動している団体が、元気で活力のある団体だと考えていた。そのために、集まる場所や機会が必要だと考えていた。「きらりよしじまネットワーク」は「よしじま地区活性化センター」, 「上川名地区活性化推進組合」は「農村レストラン」に住民が集まり、地域や行事について話している。調査を進める中で、2つの団体ともに単に人が集まる場所を確保しているだけでなく、集まった人が適切に合意形成を図ることができるような「場づくりの工夫」が行われることが分かった。

「きらりよしじまネットワーク」は、年4回の住民ワークショップからの企画立案、総会での承認・事業実施へと至る仕組みがしっかりと構築されていた。ワークショップには子供も交えて幅広い年代の参加者があり、多くのアイデアや課題の洗い出しが行われる。その後、小部会や総会の場で実施するワークショップで出た意見の精査や、事業化できるかといった協議が行われる。また、話し合いの場だけでなく、実践の場や自分たちが稼ぐ場等、様々な場を設定することで、課題解決に向けて共に学ぶ成長の場を提供している。

「上川名地区活性化推進組合」は、地域住民がお互いに対面で話すことを重要視している。直接会って話をする中で、お互いの意見を率直に伝え合うとともに、対話によって信頼関係が育まれている。地域の拠り所である「農村レストラン」に住民が集まり、どぶろく作りで作ったお酒をみんなで飲みながら、地域の行事について話し合いをしていた。ただの飲み会ではなく、お酒が入ったところでメンバーがどのような考えを持っているか、本音を引き出すことを目的として行われている。キーパーソンが工夫して言葉を投げかけ、メンバーの意見を集約するために心を砕いている。このようにお酒の場で根回しをすることも、団体を元気にする手法の一つとして考えられる。

どちらの団体も集まる場を確保し、繰り返し顔を合わせることで仲間意識が醸成されている。物事を決めるための会議だけではなく、参加者の意見が発散される「決めない会議」も行われており、集まる場で対話が生まれる場づくりの工夫を図りながら合意形成の機会を設定している。メンバーの総意のもとに活動するからこそ元気に活動することが可能となり、そのための合意形成の場や機会がとても重要であることに気づくことができた。

#### 5. 「調査の中で見えてきた新たな要素」

##### ・世代間交流

2つの団体を調査する中で、活動を持続するためには世代を超えた交流が重要な要素であることが見えてきた。子供から青年層、高齢者まで様々な世代が共に活動することで、世代を超えたつながりが生まれるようになる。その中で目的の共有や課題について話をする機会が増え、若い世代にも当事者意識や意欲が芽生えるのではないだろうか。団体の意思を若い世代へと引き継いでいくためには、世代間交流の中で、任せる側も、新たに任される側も、希望を持って受け継げるような体制を築く必要がある。様々な世代が繋がることで、次世代の人材育成にも繋がっていくと考えられる。

## ・資金の確保

目的達成のため、または団体活動を持続するためには、一定程度の資金が必要になってくる。2つの団体を調査する中で、資金の確保についても団体を運営していく中で必要な要素と考えた。「きらりよしじまネットワーク」では全世帯から会費を徴収したり、食堂などを運営して得られた売上を自主財源として確保したりしている。特徴的だったのが、行政から補助金や助成金、委託金を受けている点である。資金獲得のために国や県に積極的に働きかけ、委託金・補助金が収入の約7割を占めている。また、高齢者の所得向上のため、高齢者が栽培した野菜を若者が東京で販売するという事業も実施しており、高齢者には収益を得ることでのやりがいを、若者には地域に貢献することでのやりがいを、それぞれ「お金」が媒介している。

一方、「上川名地区活性化推進組合」は、行政を頼りにしない自立した団体を目指し、活動をしている。年会費のほか、農村レストランの収益の一部を活動費に充てる等、工夫して事業を実施している。

いずれの団体も、活動を続けていくために、安定した資金を確保する経営的視点を持っていることが分かった。

## ・地域資源の活用

2つの団体では、共通して地域資源を生かした活動をしている。どちらも、地域の食に関わる食堂や農村レストランが開かれ、食を通して人が集う場ができている。産直やどぶろくの生産へと発展している事例からも、地域の素材を価値ある「資源」と捉えて活用している。

「きらりよしじまネットワーク」では、移住者との関わりの中で、その人のスキルを生かして関わってもらおう手法を取っているとお話があった。地域人材の発掘という資源の活用がなされている。

「上川名地区活性化推進組合」では、雑魚獲り等の昔からの遊びをイベント化し、地域に根付く文化を資源として活用している。

このように、活動するフィールドを理解し、文化財や芸術作品、名産品だけでなく、人や、まだ確立されていない素材を発掘し、「強み」として発信していく姿勢が両者にあった。地域資源を活用し、持続させようという意識、それと同時に地域資源をヒントに地域社会を持続的に発展させていくといった挑戦的な姿勢も、活動を活性化させる要素として考えられる。

## ・広い仲間意識

「きらりよしじまネットワーク」では、東京での事業を実施する際には、関東圏の学生にも声をかけて参加してもらおうという話があった。また、「上川名地区活性化推進組合」は、地区内に住んでいなくても仲間として受け入れる意識を大切にしており、交流人口を増やしている。目的を達成させるためには住んでいる場所や所属にとらわれず、広い仲間意識、大きな受け皿を2つの団体ともに設定している。広い視点で、より多くの人を巻き込み仲間とする意識を持つことも、活動を活発にさせる要因と考えられる。

ま と め

## ま と め

私たち研修委員は、「元気な団体の秘訣を探る」というテーマのもと、全国的にも先進的な活動を行っている「きらりよしじまネットワーク（山形県川西町）」と、仙南地域で地域に根差した活動を行っている「上川名地区活性化推進組合（宮城県柴田町）」を調査対象とした。

調査の結果、我々が仮説で挙げた団体が自主的に活動を行うために必要な要素である「目的」「人」「意欲」「場（機会）」の4つの要素に加え、2つの団体を比較・考察して新たに見えてきた「世代間交流」「資金の確保」「地域資源の活用」「広い仲間意識」の4つを加えた計8つの要素が、元気な団体の秘訣として考えられることが分かった。

### 「目的」

元気に活動している2つの団体では、活動の目的がとても明確であった。「きらりよしじまネットワーク」は、住民主体の地域づくりの実現を目的に、PDCAサイクルに住民の意見が十分に反映されていた。「上川名地区活性化推進組合」は、日頃からのコミュニケーションを通して、自分たちが楽しく活動するという目的をメンバー同士が共有していた。

### 「人」

仮説では、中心的役割を担うキーパーソンが元気な団体に必要な要素であると考えた。それに加えて、「きらりよしじまネットワーク」での人材育成システムのような、意図的な人づくりの仕組みも大事だということが分かった。また、「上川名地区活性化推進組合」の事例からは、地域での担い手育成には難しい課題があることも改めて分かった。

### 「意欲」

「きらりよしじまネットワーク」では愛郷心が、「上川名地区活性化推進組合」では郷土愛が、それぞれの活動を進める意欲の基になっていることが分かった。どちらの団体も愛郷心・郷土愛が基になって生まれる意欲が、事業のやりがいにつながっていた。さらに、愛郷心・郷土愛がキーパーソンのより強い熱意・意欲によって、周囲の人たちに伝播していることも分かった。

意欲があれば、団体のメンバーが同じ方向を向きやすくなり、やりがいを感じながら事業を実施することができる。意欲の高まりが活発な活動を可能としていることが分かった。

### 「場（機会）」

「きらりよしじまネットワーク」は、住民の意見を集約する場として年に4回のワークショップを開催し、そこで出された意見を事業化するという仕組みが整っていた。さらに参加者に対して、来てくれたことに感謝を示すことが良好な雰囲気をつくり、団体の活動を活性化する第一歩であることも学ぶことができた。また、「上川名地区活性化推進組合」では、農村レストランでの対話やどぶろく作りで作ったお酒を活用した飲みニケーションが意見集約の場となっていた。2つの団体とも場づくりやその場の雰囲気づくりに工夫が見られた。

様々な背景を持つメンバーの意見をどのように集約していくかという点を考えたり工夫したりする過程は、それ自体が貴重な学びの場であり、つながりづくりの機会となっていた。

## 「世代間交流」

どちらの団体からも、活動を継続するためには世代を超えた交流が重要な要素であるということが分かった。子供から青年層、高齢者まで、地域の様々な世代とともに活動することで、年代を超えたつながりが生まれ、その中で目的の共有や課題について話をする機会が増え、若い世代にも当事者意識や、活動への意欲が芽生えていくことが見られた。

また、団体の意思を若い世代、次の世代へと引き繋いでいくためには、世代間交流の中で任せる側も、新たに任される側も、希望を持って受け継げるような体制を築いておく必要があることも分かった。

## 「資金の確保」

どちらの団体も団体としての活動を継続するためには、一定程度の資金が必要となっていた。

## 「地域資源の活用」

「きらりよしじまネットワーク」では、大人と子供が共にフィールドワークを行ったり、移住者のスキルや交流人口の拡大による外の力を活用したりしながら、地域の魅力や課題を活動の展開に生かしていた。「上川名地区活性化推進組合」では、ホテルの観察や竹ぼうき作り、雑魚獲りといった、昔ながらの自然や遊びをイベント化することで地域の資源を有効に活用していた。

## 「広い仲間意識」

どちらの団体とも、目的のためには住んでいる場所や所属にとらわれず、広い仲間意識や大きな受け皿があるということが共通していた。より多くの人を巻き込み仲間とする意識を持つことも、活動を活性化させる要因であることが分かった。

このことから、以上8つの要素が「元気な団体の秘訣」と言える。

団体活動や人材の育成で課題があり、活動がうまく展開できていない場合には、この8つの要素のいずれかが欠けてしまっていることが考えられる。

ただし、これらの要素が足りないからといって、すぐに補おうとすることは拙速であろう。様々な問題が絡み合っている地域の中に存在している団体は、欠けている要素をすぐに補えない事情があることも忘れてはいけない。人や地域のつながりが様々な課題を解決する原動力になり得ることは、2つの団体を調査する中で強く感じられた。だからこそ、我々はその団体に寄り添い、様々なつながりが生まれるように手助けすることが、団体育成の最初の一步になるのではないかと考える。

現状の私たち社会教育主事の活動を振り返ると、団体の事務局、イベント・講座運営等、団体や人と関わる仕事が多くを占めている。日頃の活動の中で、解決が難しそうな問題に直面した際に、私たちがこの調査によって導くことができた8つの要素に照らし合わせて状況を判断することが、課題解決の一助につながっていくと感じた。また、新たな団体の設立や実行委員会等の運営の際にも、この8つの要素を意識することが大きな助けとなるであろう。

私たち社会教育主事が、それぞれの地域にある様々な団体の支援にあたる際、この8つの要素を意図して対応することで、より一層活動が活発にできるように働きかけたい。願わくは、この報告書を読んでもいただいた同じ立場の皆さまにとっても、今後の業務の一助になれば幸いである。



おわりに

## お わ り に

本会には、社会教育主事として拝命される前から研修委員として携わり、2市7町の社会教育推進の一助となるよう力を尽くしてまいりました。今年度、研修委員長という大役を務めさせていただきましたが、研修を進めるにあたり苦難の連続でした。一冊の研修報告書として発刊に至ることができ、胸をなで下ろしております。これもひとえに、研究協議会からの御指導、私とともに研修に励んできた研修委員の皆さまのお力添えがあつてのものであり、心より深く感謝申し上げます。

今回は委員の皆さまから、各市町の社会教育現場の課題や意見を出していただき、「団体の主体的な活動」に焦点を当てて研修を行うこととしました。現在、様々な団体では、活動数の減少、後継者の発掘及び育成等といったはっきりした課題がある中で、有効な支援の手立てが見いだせない現状がありました。さらに、追い打ちをかけるかのように、近年では新型コロナウイルス感染症が蔓延し、休止や解散といった団体が各市町で増加し、その流れをなかなか止められない状況でした。先進地として山形県川西町の「きらりよしじまネットワーク」の取組事例と、仙南地域で多くの実績ある団体として柴田町の「上川名地区活性化推進組合」取組事例を照らし合わせ、主体的に活動できる団体に欠かせない共通項を抽出することができました。すばらしい2つの取組から行政側の支援や関わり方について、改めて学び直すことができました。本研修では提言まで至ることができませんでしたが、委員の皆さまの学びとこの報告書が、今後の団体育成を考える際の一助となれば幸いです。

今回の研修を進めるにあたり、過去の報告書を振り返る機会が多くありました。改めて社会教育とは絶対的な答えのない教育であり、変わりゆく時代背景を基に自分自身で答えを導き出すしか方法のない教育だと思いました。これは、団体育成にも同じことが言えると考えております。運営基盤を維持するには、過去の事柄を学び、守りつつも固執はせず、新しい風を取り入れてつくる、「温故知新」のような運営が必要だと考えています。社会教育に携わる者は地域の「つながりづくり」の推進を図るため、助言や指導の前に、現場により多く足を運び、実態の把握や現場の声の収集を忘れてはならないのだと、改めて強く決意することができました。

最後になりますが、報告書の発刊にあたり御支援及び御協力を賜りました多くの皆さまに厚くお礼を申し上げ、おわりの言葉とさせていただきます。

令和5年3月

令和4年度大河原地区社会教育主事研究協議会研修委員会  
研修委員長（柴田町社会教育主事）渡辺 光

【大河原地区社会教育主事研究協議会】			
白石市	*櫻井 一樹		
角田市	辻 琴江	*佐藤 克宏	
蔵王町	☆佐藤 洋一	*我妻 健太	梶原 一貴
七ヶ宿町	小掠 政光	*佐藤 深奈美	
大河原町	*吾妻 晃次		
村田町	*岡本 健志		
柴田町	◇高橋 秀之	大石 恵美	◎渡辺 光
川崎町	村上 透	*大宮 義之	
丸森町	○荒井 優作		
仙南地域広域行政事務組合	*大津 滉太		
宮城県大河原教育事務所	八島 信	*菅原 秀樹	

☆協議会長  
◇協議会副会長  
◎研修委員長  
○研修副委員長  
\*研修委員

## 【令和4年度 研修委員】



角  
佐藤 市  
克宏

仙南  
大津 域  
湊太

蔵  
我妻 町  
健太

村  
岡本 町  
健志

七ヶ  
佐藤 宿  
深奈美

大河  
吾妻 原  
晃次

白  
櫻井 市  
一樹

川  
大宮 崎  
義之

蔵  
佐藤 町  
洋一  
研究協議会長

柴  
渡辺 町  
光  
研修委員長

丸  
荒井 森  
優作  
研修副委員長

菅原 秀樹  
教育事務所

研修報告書 第49号

# 元気な団体の秘訣を探る

～元気に活動する2つの団体の調査をとおして～

令和5年3月31日発行

編集／大河原地区社会教育主事研究協議会研修委員会

発行／大河原地区社会教育主事研究協議会

印刷／株式会社 津田印刷

## 研修委員会のあゆみ【これまでの研修報告書一覧】

No	年度	タイトル	研修代表者		
1	S48	宮城県における父母教師会活動に関する実態 ー調査報告書ー	県教育部長会編, 社会教育主事担当		
2	S49	仙南地域における母親の幼児教育に関する実態 ～3・4歳児を第一子に持つ母親～ 調査報告書	研修班長	白石市 白石市	太齋 享 伏見 光龍
3	S50	乳幼児教育の学習内容の研究 ～学習計画立案のために～	研修班長	白石市	伏見 光龍
4	S51	文化財保護行政をすすめるために	研修班長	丸森町	阿部 義郎
5	S52	生涯教育を推進するために	研修班長	川崎町	高山 恵弘
6	S53 S54	大河原教育事務所管内社会教育30年のあゆみ ～住民のところに灯をともして～	研修班長	角田市 七ヶ宿町	咲間 庄三 根元 邦美
7	S55	学習プログラムの立案(婦人学級・高齢者教室・家庭教育学級)	研修班長	七ヶ宿町	根元 邦美
8	S56	青少年及び親の意識 調査報告書	研修班長	柴田町	澁谷 孝之
9	S57	社会教育推進上の諸問題と社会教育主事の果たす役割 ～教育委員会と公民館のあり方を中心として～	研修班長	角田市	齋藤 久
10	S58	社会教育における学習内容を充実させるための工夫 ～視聴覚教材の効果的な活用をとおして～	研修班長	川崎町	大宮 昭
11	S59	少年教育の充実をめざして ～管内における現状と課題～	研修班長	白石市	佐藤 重仁
12	S60	青年教育の充実をめざして・I ー青年活動の実態ー	研修班長	丸森町	鈴木 悦郎
13	S61	青年教育の充実をめざして・II 「青年の生活意識と余暇活動についての調査」報告書	研修班長	村田町	高橋 徳夫
14	S62	青年教育の充実をめざして・III ー青年教育事業の進め方を考えるー	研修班長	角田市	大友 喜助
15	S63	スポーツ人口の拡大を図る一方策 高齢者向けニュースポーツの開発を通して	研修班長	大河原町	佐々木寿信
16	H元	スポーツ人口の拡大を図る一方策II 高齢者向けニュースポーツの普及を通して	研修班長	角田市	太田 文夫
17	H2	大河原教育事務所管内社会教育40年のあゆみ 新しい学習社会への架け橋	研修委員長	丸森町	岡崎 勝志
18	H3	生涯学習の鼓動 青年・家庭・高齢者教育の充実をめざして	研修委員長	村田町	高橋 定光
19	H4	生涯学習の鼓動part2 成人・少年・婦人教育の充実をめざして	研修委員長	大河原町	尾形 彰
20	H5	学校週5日制と社会教育のあり方	研修委員長	川崎町	小林 志郎
21	H6	青年教育の充実をめざして・IV ー昭和61年度調査結果との比較・考察を通してー	研修委員長	蔵王町	日下 朝男
22	H7	生涯学習のまちづくりをめざして 生涯学習推進の現状と課題	研修委員長	村田町	山家 孝弘
23	H8	生涯学習の課題と展望 学社連携をめざして	研修委員長	白石市	小野 輝彦
24	H9	生涯学習の課題と展望 学社連携から学社融合へ	研修委員長	村田町	山家 孝弘
25	H10	生涯学習の課題と展望 よりよい公民館活動をめざして	研修委員長	蔵王町	砂金 毅
26	H11	生涯学習の課題と展望 よりよい公民館活動をめざしてII ～公民館入門一つどう・まなぶ・つながる～	研修委員長	大河原町	八島 良隆
27	H12	大河原教育事務所管内社会教育50年のあゆみ 新世紀・きえない虹をおいかけて	研修委員長	白石市	村上 忠敏
28	H13	学社融合の課題と展望 総合的な学習の時間における社会教育のアプローチ	研修委員長	七ヶ宿町	伊藤 貴子
29	H14	学社融合の課題と展望 学校教育と社会教育の協働をめざして	研修委員長	丸森町	菊地 浩二
30	H15	学社融合へのアプローチ 知って得する！文化財・その活用	研修委員長	丸森町	伊藤 博道

## 研修委員会のあゆみ【これまでの研修報告書一覧】

No	年度	タイトル	研修代表者		
			研修委員長		
31	H16	ヤング・エボリューション ～青年の意識調査をとおして、今の青年たちを考える～	研修委員長	大河原町	小野 宏
32	H17	ヤング・エボリューションⅡ ～青年教育の活性化をめざして～	研修委員長	村田町	鎌田 浩孝
33	H18	動き出した次世代育成支援 ～これからの子育て支援の在り方を考える～	研修委員長	七ヶ宿町	高橋慎太郎
34	H19	時代を映してきた視聴覚教育 ～使ってみよう自作視聴覚教材～	研修委員長	角田市	八島 利美
35	H20	がんばってます！ジュニア・リーダー ～過去 現在 そして未来へ～	研修委員長	川崎町	村上 透
36	H21	生涯スポーツの振興をめざして ～総合型地域スポーツクラブの可能性をさぐる～	研修委員長	柴田町	大川原真一
37	H22	生涯スポーツの振興をめざして vol.Ⅱ ～仙南型総合スポーツクラブへのアプローチ～	研修委員長	白石市	小室 徹彦
38	H23	大河原教育事務所管内社会教育60年のあゆみ ～変わり続ける時代を生きる～	研修委員長	角田市	大内 克典
39	H24	協働教育推進へのアプローチ ～各市町の実践から見えたもの～	研修委員長	川崎町	富田 丈靖
40	H25	これからの成人・高齢者教育を考える ～地域活動と学習に関する意識調査～	研修委員長	柴田町	加藤 栄一
41	H26	これからの成人・高齢者教育を考えるⅡ ～住民とともに豊かな学びをめざして～	研修委員長	大河原町	伊藤 敏之
42	H27	子育て・家庭教育支援の充実をめざして ～手と手をつなぐみんなのチカラ～	研修委員長	柴田町	木村 正人
43	H28	未来に伝えよう！地域の文化財 ～社会教育的視点からのアプローチ～	研修委員長	川崎町	佐藤伸一郎
44	H29	元気な地域づくりをめざして ～青少年の地域活動に関する意識調査～	研修委員長	七ヶ宿町	小掠 政光
45	H30	元気な地域づくりをめざしてⅡ ～新時代へつながる地域活動とは～	研修委員長	村田町	岡本 健志
46	R元	生まれ公民館！開け学びの扉！ ～令和の社会教育施設を考える～	研修委員長	角田市	齋藤 史織
47	R2	これからの社会教育の本質を考える ～持続可能な地域づくりをめざして～	研修委員長	白石市	森 健光
48	R3	大河原教育事務所管内社会教育70年のあゆみ	研修委員長	大河原町	吾妻 晃次
49	R4	元気な団体の秘訣を探る～元気に活動する2つの団体の調査をとおして～	研修委員長	柴田町	渡辺 光